

機械学習時代の技術的複製：汎化・過学習概念に着目した音楽事例分析

加藤夢生（東京大学大学院総合文化研究科）

本発表は機械学習を用いた音楽作品の制作過程を汎化・過学習概念を手がかりに分析することを通じ、音楽表現において、この技術が「複製／非複製」の二項対立を超えた複製概念を表出することを示す。

近年の生成AIの普及は機械学習と文化生産の関係を際立たせる一方で、その利用は従来の技術的複製と重なりながら逸脱し、政治的・感性的・文化的緊張を生んでいる。ディープフェイクや過去の芸術様式の再現、そこから派生する法的論争はその典型である。こうした複製、模倣、再現をめぐる議論は多方面で展開されてきたが、音楽の事例については十分に論じられていない。音楽と複製技術の歴史的な関わりを鑑みれば重大な欠落である。

本発表は二つの事例分析を中心とする。ここで焦点となる汎化・過学習とは、予測モデルが学習データに従う忠実度に関わる概念である。(1)「よみがえる美空ひばり」(NHK & ヤマハ 2019) では、忠実な再現と新たなスタイル創出の両立に汎化性能が本質的な問題であったことを示す。(2)「Echoes for unknown egos」(YCAM & 石若駿 2022) では、演者のドラミングを過度に模倣するシステムの過学習が表現の一要素となっていたことを示す。本発表はこれらの技術的複製を〈半複製〉や〈過複製〉として特徴づけた上で、それらの概念は機械学習技術に内在的であった一方で、音楽的価値を持つためには、学習データや演奏スタイルの意識的選択を通じて、音楽制作者による真正化が不可欠であったことを指摘する。